

まえがき

京都大学は新城新蔵博士が、理学部物理学教室第4講座に教授として宇宙物理学の講座を開設（1907年）して以来、100年に渡って、宇宙に関する様々な分野—宇宙物理学、天文学、地球電磁気学、超高層大気物理学、宇宙電波工学、航空宇宙工学、—で世界の最先端の研究を成し遂げてきました。現在もこれらの分野で世界をリードし続けており、これだけ宇宙に関する多くの研究分野を有する大学としては、世界有数と言っても過言ではありません。遠方宇宙から身近な宇宙に至るまで、理学から工学まで、あらゆる分野で、世界の最先端の研究を推進しています。100年の歴史をひもとくと、太陽コロナや火星の研究、恒星進化論と太陽系起源論、宇宙論やブラックホール理論、X線天文学、磁気圏電離層研究、宇宙プラズマ、超高層大気物理学などで、世界的な成果をあげてきました。一方、東洋天文学史というような学際的にユニークな分野も生み出しています。近年は、人工衛星による宇宙探査の時代の本格的な幕開けと共に、宇宙太陽発電衛星、宇宙天気予報、宇宙探査機といった分野で先駆的な研究を開拓してきています。京都大学総合博物館企画展示は、そのような京都大学の宇宙に関する最先端の研究をベースに、現代天文学、現代宇宙科学が明らかにしてきた宇宙の謎にせまろう、というものです。それを基に、われわれはなぜ生まれたのか、これからどこに行こうとしているのか、という人類永遠の問題と宇宙探査や宇宙開発の未来を、市民の方々、とりわけ、未来を担う子供たちと一緒に考えてみたい、というのが企画展示開催の目的であり、本書出版の目的です。

京都は宇宙の研究にとって特別な場所でもあります。天文学の歴史の中で、「かに星雲」と呼ばれる謎の星雲が1054年に爆発した超新星爆発の残骸であることがわかったのは、藤原定家の明月記における「客星」の記述のおかげでした。実はこの明月記の記録は、当時の平安京で陰陽師として知られた安倍晴明の一族が、夜空をくわしく観察し、それをのちに藤原定家が記録したものでした。1000年ほど前に活躍した安倍晴明一族は、その意味で、京都における宇宙研究の偉大な先達、パイオニアと言えるかもしれません。のみならず明月記に記載された1006年の超新星爆発の正体が、1000年の時を経て、京都大学X線天文グループの活躍により明らかにされたのです。1000年にわたる「京の宇宙学」の伝統の上に、近代100年における「京都大学の宇宙学」が発展してきたとも言えます。企画展、本書を通じて、このような興味深い宇宙研究の歴史が京都であったことも知っていただければ大変幸いです。

京都大学総合博物館「京の宇宙学」企画展示実行委員会
委員長 柴田一成